



TITLE:

39 地域の環境条件に応じた猿害対策の分析

AUTHOR(S):

堀内, 史朗

CITATION:

堀内, 史朗. 39 地域の環境条件に応じた猿害対策の分析. 霊長類研究所年報 2010, 40: 145-145

ISSUE DATE:

2010-09-21

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166754>

RIGHT:

行った。

Timed Mating 法により作成された妊娠ザルへのホルモン曝露とその後に生まれた新生児の脳組織学的解析および実験群母子の行動観察実験を行った。その結果、これまでに、ニホンザル新生児の脳の前視床下部間質核の大きさに性差があること、妊娠初期のカニクイザルへのステロイド曝露により、新生児の前視床下部間質核の細胞群の大きさが変化することが分かった。さらに内分泌学的には、カニクイザル胎児では血中テストステロンに加えエストロゲンも一過性の高値を示すことを確認した。行動学的解析により、子ザルの位置移動や母へのしがみつき行動は、テストステロン投与母ザルから生まれた子ザルでは、出生直後の1-2週齢から活発に見られることが分かった。

38 大型類人猿のヒト由来疾病への反応に関する基礎研究-チンパンジーとヒトの交差感染症の長期研究-

郡山尚紀（北海道大・院・獣医）

対応者：宮部貴子

我々は霊長研のチンパンジー14頭について、ヒト由来病原体に対する抗体の有無を調べた。全63種類のウイルス、細菌、寄生虫のうち、呼吸器系の感染症を中心に37種類の病原体に対する抗体を有している事がわかった。具体的には近年野生下の大型類人猿で流行が取り沙汰されているヒトメタニューモウイルスとRSウイルスに関して全ての個体が抗体を有していた。またそれ以外に高率ではパラインフルエンザウイルス3型、アデノウイルス4、5型、コクサッキーウイルスA群7型、百日咳、ヒトヘルペスウイルス6が高率に見つかったが、これらは野生からの報告はまだない。今後こういった飼育下チンパンジーが高率に感染している病原体に関して野生下のチンパンジーが観光客などから感染する可能性がある。我々の研究は前回の2008年から続いているが、頭数、検査対照ともに増やす事ができ結果がより有益なものとなっている。また、今回の結果はヒトとチンパンジーの間で種を越えて感染が成立するメカニズムの解明に向けて重要な結果であり、今後も継続的に進めていきたい。

39 地域の環境条件に応じた猿害対策の分析

堀内史朗（明治大・研究知財・戦略機構）

対応者：半谷吾郎

全国市町村で猿害対策に従事する担当者が、どの対策が有効と考えているかを明らかにするため、現地調査

および質問紙調査を実施した。

神奈川県湯河原町にて猿害の担当者の方に聞き取り調査を実施した。同町では、奥山に猿が好む植生（野猿の郷）を作り、そこに猿を誘導する対策を取っていたが、①植林範囲が狭すぎる、②植林が枯れてしまった、などの為に失敗した。現在は人に直接危害を加える猿の駆除を試みているが、保護管理計画の制約のために困難である事情を説明してくれた。

保護管理計画を策定している18府県内の250市町村を対象として郵送質問紙調査を実施した。3月31日時点で145の自治体から返送されている。有効と考えられている対策は、上から順に「捕獲・駆除」「住民の合意形成」「電気柵」、無効と考えられている対策は、上から順に「食べられにくい作物の選定」「生息地と農地のバッファー作り」「森林整備」であった。有害駆除への制約に不満を述べる返答が非常に多かった。各地の人口密度や植生、猿害の程度・歴史を踏まえた分析は、これから行う予定である。

40 ヒト以外の霊長類に変形性斜頭は存在するか

海部陽介（国立科博）

対応者：西村剛

本研究では、変形性斜頭（出生時や発育過程で生じる頭骨の歪み）は二次的晩成の進化に伴って顕現してきた、ヒト特有の現象であるとの仮説を検証することを目的とし、そのために様々な種の霊長類の頭骨に、現代人のような変形性斜頭が存在するかどうかを調査する。まず霊長類研究所にていくつかの異なる種の霊長類頭骨を吟味し、脳頭蓋の水平面内および前頭面内の非対称性と顔面の歪みを定量するため、33の計測点についてアーム式三次元計測器を用いて座標を記録することにした。次に計測誤差を抑えるため、計測時の頭骨の固定法について検討し、以下の手順で計測を行った。最初に1つの点について2回座標を記録し、誤差が0.5mm以内であればその平均値を採用するが、そうでない場合は誤差がこの範囲になるまで計測を繰り返す。平成21年度は、霊長類研究所にて、チンパンジー、ゴリラ、ニホンザル、キングコロボスのデータを採取した。今後さらに他研究機関の所蔵コレクションを対象にデータ採取を継続する予定であるが、現時点までに観察したサル類の脳頭蓋には、少なくとも現代人に時折認められるような極端な変形性斜頭は見つかっていない。